中友会

［発行所］
中友会
港区西新橋1-22-13
全日本中学校長会館202号室
東京都中学校長会事務局内
TEL 03-3504-8705
FAX 03-3504-8706

会則第2条
- 親睦
- 互助
- 生涯学習

http://chuyu-kai.org/

後世への最大遺物

中友会副会長　宇津木　順一

本会副会長、田辺守一先生が昨年10月交通事故で急逝されました。あまりの突然のことで信じられぬ思いでした。

田辺先生は、副会長として、中友会の重要な事業である合祀慰霊祭や会員名簿発行を担当されておりました。いつも自分の考えを率直に表明され、前向きに積極的に中友会のために尽くされました。

先年、中友会の宿泊研修で同じ部屋に泊まったことがありました。そのときの会話の中で、若いときに、北海道で鉄道の仕事に就いたことなどをうかがいました。その後、志を新たに教職の道へ進んだのでしょう。そのいきさつなど細かいことは話されませんでしたが、きっと、大変なご苦労やご努力があったのだと思い、敬服しておりました。また、退職後も各方面で活躍されておりました。先生の持ち前のエネルギーが活動の原動力になっていたのだと思います。

常に、前向きに積極的に人生を全うされた先生でした。

「亡くなって、その偉大さが分かる人がいる」これは、最近の新聞記事で目にした言葉です。ずっしりと重く心に残りました。

地元、多摩地域の昆虫を中心に、動植物の採集、研究を続け、自然同好会を創るなど自然愛好家も多く育てた町の博学者が一昨年亡くなりました。その人を偲んで、昨年末、研究仲間や故人を慕う方々によって、故人が遺した標本の展示会が開かれました。この記事は、その展示会を取材した新聞記者の言葉（M新聞コラム　記者のひとりごと「光り輝く『定点観測』」25・11・8）です。

「作製した標本約2万点のほとんどを故郷の日の出町で採集した。半世紀以上もの『定点観測』が、自然の変容を浮かび上がらせた」「故郷を愛し、その自然の中で生きた。貫かれた75年の人生が光り輝いて見えた」とも記されていました。

この記事を読んで、お金とか名誉とかにこだわらず、永年にわたって、地道にこつこつと標本を作製し、研究を積み重ねて、郷土の自然の変容を標本としてとらえ、社会に遺したこの人の生き方に頭が下がる思いがしました。

同時に、この記事から、自分は、はたして今までに何ができたのだろうか、何を遺すことができるのだろうか、自分が生きたしるしは何だろうか、などと、年を重ねた今、改めて心に問うたのです。

自分なりに一生懸命に自分の道を切り開いてきたようには思いますし、仕事に向かって、真剣に精一杯努力してきたとも思っています。でも、それは誰もがやっている当たり前のことであり、自分の生活のために全精力を注いだだけではないだろうか。本当に人のために尽くしたことなのだろうか、世の中のために多少なりとも貢献したしるしを残すことができたのだろうか、などと思い、自分の今までの生き方を考えさせられたのです。

この問いに対して思い起したのが、中学校の恩師から紹介されて読んだ、岩波文庫、内村鑑三著『後世への最大遺物』でした。

この著書は、明治27年、著者が33歳の時に、箱根の芦の湖畔で講演した内容を本にしたということです。その中で、著者は、我々は後世に何を遺せるかについて論じています。

金や、事業や、思想の大切さも説きながら、最後に、「われわれに後世に遺すものは何もなくとも、われわれに後世の人にこれぞというて覚えられるべきものは何もなくとも、アノ人はこの世の中に活きているあいだは真面目なる生涯を送った人であるといわれるだけのことを、後世の人に遺したいと思います」（原文のまま）と結んでいました。

親しい方との別れが多くなった歳になり、改めてこの言葉が印象深く思い出され、心に響いたのです。